

## ◎清水小学校「3年生社会科授業」を実施！市史啓発活動

3月4日(木)の5～6校時に清水小学校からの依頼で「清水の街の今と昔」とのテーマで社会科の授業を生涯学習課市史編さん室田村と吉本が実施した。授業では、「古写真」「江戸時代末の絵図」「明治期の地形図(5000分の1)」を比較し、土佐清水の市街地がどのように変遷してきたのかを視覚を通じて考察した。絵図や地形図の読図は、小学校3年生にはその理解が難しく、十分にその内容を深めるには至らなかった。

「古写真」では、約70年前の「旧中村市役所(四万十市)西階段で行われていた紙芝居の写真(昭和33年)」と「小学校高学年女子3名が赤子をおぶって談笑している写真(昭和32年)」を使って、その読み取りを進めた。古写真を通じて、当時の時代背景と写真に写っている人の心情を予想し、これを読み取るトレーニングである。

このようなトレーニングを通じて、郷土の歴史や文化について少しずつ理解を深め、『新土佐清水市史』編さん事業の普及と啓発を図ることが今回のねらいである。これを推進するためにも、これからの未来を背負う小・中学生への啓発が重要であり、今後も学校教育との連携を強化し、試行錯誤しつつ、取り組みを展開していきたい。なお、この授業では、高知新聞清水支局長・山崎彩加記者に取材していただいた。



## 「市史執筆のブレイクタイム(25)」

### “池 道之助”

市史編集委員長 田村公利

#### (1) その生い立ち

文政4年(1821)、中浜浦に「百姓佐平の長男」として生まれた。中浜万次郎より6歳年上の先輩である。百姓＝農民ではない。父佐平が「百姓」とあるが耕作を主とする農民ではない。これまで研究者や学校教育現場でも百姓＝農民と誤解されているが、「百姓」の中には富裕な商人・廻船人も含まれていた(註1)。佐平は「志和屋」という屋号を持つ廻船商人であった。万次郎が幕臣として上京した後に道之助に文を送っている。その宛名が「志和屋道之助」となっていることがそれを裏付けている。

志和屋とは池姓を名乗り、高岡郡志和村(現四万十町志和)で村役人を勤めた。そこで7反余りの自作農を行った。同時に7町余りの地主も兼ねた富裕な百姓である。藩政後期に栄え、米屋として藩士の知行米などの売買や貸し付けなども行った。また、酒屋・カツオ船・大漁網などのオーナーとなり、広く事業を展開していた(註2)。

現在の大覚寺境内の共同墓地に池道之助の父佐平和の墓碑があり(写真1)、その銘は「志和屋佐平」と刻まれている。このことから、おそらくは、四万十町志和に所在していた志和屋本家と道之助は、血縁関係など何らかの関係性を有していたことが推測される。近世を通じて穀物生産が少なく、特に、漁浦として米の生産が少なかった足摺半島一帯に廻船を通じて米の流通を行っていた可能性が高い。また、中浜浦で老役を勤めた田島家とも婚姻を通じて親戚関係にあり、経済的にも恵まれ、地元有力者の一人であった。

道之助は、幼少の頃より学才があり、地域の識者に漢学・易学・天文学・兵学などを学んだ。15歳のとき、和食村の小川為十郎を師事し、柔術や剣道を学び、免許皆伝となる。その後も精進を怠らず、中村の維新の志士樋口真吉・甚内兄弟にも弟子入りし、長刀の剣術を習得した。長刀とは主に女性が使用する「なぎなた」ではなく、文字通り刃先の長い刀のことである。樋口真吉は大石流の剣術で長い刀を使用することで知られる。通常は2尺3寸ほどの刀が、道之助の帯刀していた刀は、3尺1寸もあった(註3)。このように文武に優れ、経済的にも恵まれていたことから、道之助は、34歳のときに土佐藩の足輕に抜擢され、高知で6年間勤務したが目を患ったことで辞職し、中浜浦に戻る。故郷に道場を構えて後輩たちに学問や剣術を指導した(註4)。

#### (2) 道之助の転期

間もなく幕藩体制が瓦解する直前の慶応2年(1866)正月、中浜万次郎が薩摩藩招聘の仕事が一段落し、中浜に帰省してきた。万次郎の生家は手狭であり、やむを得ず、互いに顔見知りですごく、家屋が



(写真1) 道之助父・志和屋佐平の墓碑



(写真2) 池 道之助



比較的広い道之助の家に一時的に寄宿させてもらった(註5)。

同年3月末、万次郎は土佐藩が開設した藩校開成館に招聘されることになった。そこで学問や武道に長けた気心の知れた郷土の先輩道之助を側近として高知城下に同行させようと万次郎は考えた。万次郎の熱心な説得が功を奏し、道之助は万次郎に随行することになった(註6)。妻と四人の子どもたちを置いての旅立ちは後ろ髪を引かれる思いであったに違いない。

高知城下に居を移し、開成館での仕事も軌道に乗ってきた同年7月、万次郎は後藤象二郎らとともに藩船・武器購入のため長崎出張の藩命を受けた。そこで信頼する故郷の先輩道之助を頼り、測量学の修業を行うという名目で随行させた。また、10月には、上海出張でも道之助を同行させている。気心の知れた、文武に長けた道之助が側にいたことは、きっと万次郎にとって心丈夫だったに違いない(註7)。

同年12月、万次郎は土佐藩での仕事を終え、江戸に戻るが、道之助は長崎に残る。土佐商会で岩崎弥太郎・坂本龍馬に従い仕事を行った。翌・慶応3年(1867)4月、瀬戸内海で坂本龍馬率いる「いろは丸」が紀州藩船と衝突した。坂本龍馬は事故海域に近い「鞆の浦(とものうら)」にて万国公法を基に紀州藩と粘り強く交渉を進めた。この交渉に坂本龍馬・後藤象二郎とともに道之助も加わっている。この結果、土佐藩は賠償金として70,000両を受領したのである。

また、長崎丸山で英国軍艦イカロス号乗員2名が泥酔中殺害され、海援隊士にその嫌疑がかけられた。事件はイギリス公使パークスが糾弾に乗り出し、幕府や土佐藩を巻き込む騒動に発展した。土佐藩士らが誤って長崎奉行所へ収監されて取り調べを受けた。これに対して岩崎弥太郎らとともに道之助は、その無実を長崎奉行所に談判し、再捜査を促した。結果、真犯人が筑前藩士であることが判明し、誤認収監された土佐藩士らは放免された。これをイカロス事件と呼ぶ。

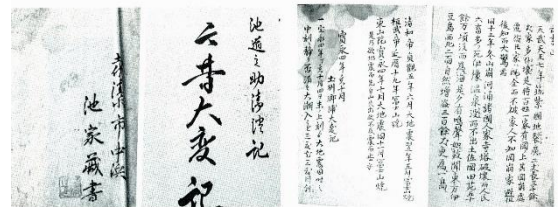
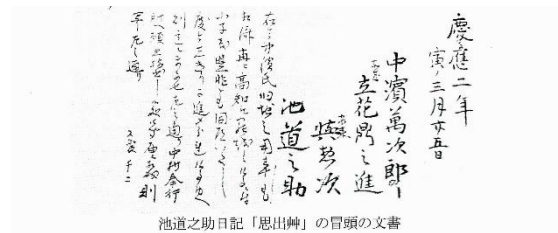
これら「いろは丸事件」「イカロス事件」などの顛末は、池道之助日記である「思出艸(おもいでみさき)」に記され、道之助もその動きに関わっていたことが分かる(註8)。

### (3) 晩年の道之助

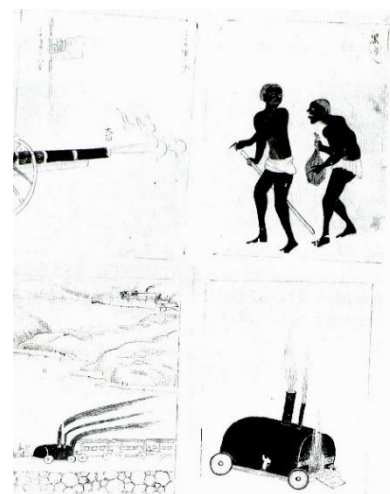
明治元年(1868)4月、開成館下代に任命されたが、まもなく体調不良のため、休暇を取り中浜に帰省した。その後も体調は回復せず、翌年4月に開成館下役を免職となる(註9)。

その他道之助に関して特筆すべきは、災害に対して防災意識が高く、松尾村や大浜村で起こった火災に対して被災者に米や金子を寄付してその救済を行っている。また、『今昔地震津波説』は、自らが体験した安政地震の中浜浦や幡多郡内の被災状況をまとめたものであり、過去の地震を研究していくうえでも貴重な史料の一つとなっている。そこには地震以外にも流星・異国船渡来・悪疫流行・明治維新などが記述されている(註10)。

中浜峠に所在する池家墓所には、安政地震が発生した年号・日時、地震直後の津波、家屋の流失、多数の死者が発生したこと、念仏などが墓碑正面に刻まれている。左面には、前日より海や井戸が濁っていたことなどその予兆を記し、「後世にそのことを伝えるために池道之助清澄がこの碑を建立した」と結んでいる(註11)。この地震津波碑は令和2年(2020)市域の他の九基の自然災害碑と共に市文化財に新



「今昔大要記」の「今昔地震津波説」の冒頭部分  
資料1



資料2「池道之助筆異国風俗描写写真」

たに指定された。

①『今昔地震津波説』（『土州郷浦大變記』『嘉永七寅年地震津波記』）、②一般に「池道之助日記」と呼ばれる「思出艸」「嘶の種」、③「池道之助筆異国風俗描写図」の3種類の史料は「池家文書」としてまとめられ、土佐清水市指定文化財として昭和36年（1961）11月13日に指定された（註12）。

明治4年（1871）、健康を取り戻した道之助は、越・加久見・養老村の村長を務めが、翌・明治5年（1872）7月、病気により逝去した。享年52歳であった。道之助は、天賦の才に恵まれ、たゆまぬ向上心を持った努力の人であった。幕末から明治維新を駆け抜け、その激動の変化の時代を生きた体感者であり、目撃者でもあった。健康でさえあれば、長崎での知己と共に大活躍し、更に大きな舞台で活躍できた人生だったと思われるだけに残念である（註13）。



(写真3) 池家墓所（地震津波）

しかし、彼の記したきめ細かい記述文書は、近世から近代に移行する時代の真実を捉えた貴重な史料であり、今後の地域史を含む日本史研究の上でその文化財的価値は極めて高い。

#### 参考文献

網野善彦『日本の歴史 00 日本とは何か』講談社、2000年

鈴木典子『池道之助日記』リーブル、2011年。

横川末吉「土佐藩における在郷（浦）商人の一類型(二)―「池家文書」（窪川町志和）の紹介―」（『土佐史談 123号』土佐史談会、1969年）

#### 註

（註1）網野善彦「2「百姓＝農民」という思い込み」「第四章瑞徳国日本の虚像」（『日本の歴史 00 日本とは何か』講談社、2000年、251—262頁）

（註2）横川末吉「土佐藩における在郷（浦）商人の一類型(二)―「池家文書」（窪川町志和）の紹介―」（『土佐史談 123号』土佐史談会、1969年、45—53頁）

（註3）永国淳哉「序にかえて」（鈴木典子『池道之助日記』リーブル、2011年、11—18頁）

（註4）山下晃弘「以南人物伝（六）坂本龍馬とかかわった男 池道之助上」（『広報とさしみず平成18年10月号』土佐清水市役所、15頁）

山下晃弘「以南人物伝（六）坂本龍馬とかかわった男 池道之助下」（『広報とさしみず平成18年11月号』土佐清水市役所、17頁）

（註5）～（註9）（註4）と同じ。

（註10）東近伸・問可勲・谷本良信・富田無事生・田村公利『土佐清水市の指定文化財』土佐清水市教育委員会、2017年。

（註11）田村公利編『土佐清水市域自然災害調査-郷土の先人たちからのメッセージ』土佐清水ジオパーク推進協議会・土佐清水市危機管理課・土佐清水市教育委員会、2020年、4—5頁。

（註12）（註11）と同じ。

（註13）（註4）と同じ。

#### 【編集後記】

来週には、3月第2週に入ります。来週11・12日（木・金）に出原恵三市史編集委員らの「足摺岬戦争遺跡調査」、16日（火）・24日（水）には「オーテピア高知での文献資料調査」を計画しています。調査の終盤です。無事故で気を引き締めて取り組んでいきます。また、季節の変わり目です。体調にはくれぐれもご留意ください。